

九、わが村の先覚

112 ◎古典の民衆化に捧げる北村季吟父子 季吟（1624-1705） 湖春（1648-1697）

季吟の主な著書
増山之井 二巻
続山之井 二巻
十会集 一巻
徒然草文段抄 八巻
後山之井 五巻
和漢朗詠集註等 十巻
土佐日記抄 二巻
伊勢物語拾穂抄 五巻
源氏物語湖月抄 六十巻
枕草紙春曙抄 十二巻
百人一首拾穂集 四巻
八代集抄 百八巻

季吟は寛永元年十二月十一日北村に生まれた。又一説では京都栗田口に生まれたとも言われるが、いずれにしても祇王村とは関係が深い。季吟は幼少より学問を好み、十九歳の時、松永貞徳の弟子となり歌学を修めた。家は代々医者であったが医業は余り好まず、医書よりも国文学の研究に没頭した。又連歌、俳諧も安原貞室に就いて習い、歌人、俳人としても有名である。有名な松尾芭蕉も其の門下から出ている。

六十六歳で幕府に召されるまで、古典歌学の研究を続け、其の間にりっぱな著作が数多くなされている。中でも「土佐日記抄」二巻「伊勢物語拾穂抄」五巻は後水尾上皇の勸覧に供されたという。二十五歳の時長男湖春が生まれている。

元禄二年季吟、湖春共に召されて、幕府の歌学方となり大いに尽した。当時の国文学が学者だけのものであったのを一般の人々に近づけなじみ深いものにしたのは、季吟父子の大きな功績である。湖春は元禄十年父よりも十年早く先立ち、季吟は寛永二年眠るように歿した。八十二歳であった。（近江の先覚 野洲郡史）

113 ◎霊元上皇に書を講じた北村可昌^{よしまさ}（1647-1718）

可昌は北村の北村伊右衛門の子で伊平といった。伊藤仁斎に学び、京都に住んだ。霊元上皇は可昌の学問の深いことを聞かれ、礼を厚くして御所に招かれた。可昌はつつしんで上皇に講義申し上げた。享保三年七月十一日病歿す。（野洲郡史 郷土誌 大日本人名辞書）

紀州大納言家
徳川御三家の一

◎紀州大納言家の学問の先生木村鳳梧^{ほうご}（1684-1769）

伊藤東涯の古義塾

貞享元年北村に生まれた。名は源太郎、後源之進と改めた。伊藤東涯に学び、東涯の歿後もその著書を校正した。寛保二年東叡山法親王の推挙によって、紀州大納言宗直の儒官となった。明和六年十月八日歿。（野洲郡史）

和歌山瑞宝院に葬る。

◎天秤棒と取り組んだ角新兵衛^{すみ}（1795-不明）

大字富波の人。寛政年間に生まれた。家は僅かの田地だけであったので、他家に雇われて働いた。勤勉によくつとめたので次第に信用を得た。後或商人より資金を借り農具を捨てて商人となり、甲賀郡の名

天明八年 一七八八

114

明治天皇は、嘉永五年の今日の文化の日にお生まれになった。

嘉永七年が安政元年である。

産、信楽焼の土びん、茶つぼ等を仕入れ、行商をした。天明年間京都に大火災のあった時、新兵衛は材木、人夫等をととのえて、俄かに家を建て、食物、日用品等を販売したので、焼あとの人々は先を争って買い求め、莫大な利益を収めた。機を見ることに敏な事は此の一事によっても分かる。其の後ますます商売繁昌し、五十歳の頃は巨万の富をつくった。(郷土誌)

◎明治天皇をお救いした村田むつ

こすみ 小住とも呼び、永原の医者村田宗種^{むねたか}の娘である。幼少の頃から男まさりの気風で勤王の志も厚く、早くから御所に奉仕したい念願を持っていた。嘉永五年明治天皇御誕生に際して、奉仕して皇子の御世話を申上げていた。

安政元年皇居炎上の時、人々は驚いて只騒ぐばかりであったが、むつはよく落着いて、御幼少の皇子を負い奉って避難した。此の時御供申上げる者もなく、人々のため通路をふさがれていたため、むつは短剣をふるい乍ら進み見る者が狂女と思い、近づく者がなかったといわれる。こうして急難を聖護院にさけることが出来、其の中に供の者も追々に追いついて来たという。安政元年十二月二十五日病歿、年六十一、遺言にも皇子の御無事御成身のことを祈ってやまなかった。(野洲郡史)

◎村治につとめた木村松五郎 (1859-1899)

当時医師は苦しい試験検定でなることができた。

115

郡会議員
明治三十二年九月三十日
在任二ヶ月

北村の人、安政六年に生まれた。明治九年苦学力行して医学を修め、明治十六年医術開業の免許を受け、十七年静岡県公立藤病院在勤を命ぜられ、十八年五月自宅に於て開業した。それより村会議員として、又最初の郡会議員として、本村や本郡のために力をつくした。明治三十二年十二月六日、四十二歳で歿した。(郷土誌)

◎名戸長 白井伊兵衛 (1844-1909)

明治五年に定められた区制によると区毎に戸長をおいた。この地方は野洲郡の第四区。戸長は今の村長にあたり、明治二十二年町村制がしかれて、やめになった。

弘化元年三月二十五日永原に生まれた。七歳より十六歳まで永原村高木の神官大隅氏について学んだ。明治十二年永原・中北・北・上屋・富波・辻町・五之里・久之部八ヶ村の戸長を申しつけられ、同十六年永原・中北・北・上屋・富波・辻町・五之里・小堤・久之部・虫生十ヶ村戸長に任ぜられ、二十二年までに引続き戸長を勤めた。其の在職中よくつとめ知事より賞与金五円を受けた。明治四十二年病を得て、享年六十六歳で歿す。(郷土誌)

庄屋
今の部落長さんのよ
うなものであったが、
もっと強い権利を与え
られていた。

116

◎徳行かおる福谷三郎兵衛（1836-1915）

天保七年五月永原に生まれた。七歳より十一歳の春まで永原対助氏に学び、十三歳の春まで大津市藤田吉蔵氏に学び、それより二年間京都岡田敬斎（神学者）に学んだ。十五歳の春生家に帰り家業に従事、二十五歳で庄屋に挙げられ、三十二歳まで勤めた。明治維新になって野洲郡組合総代（四人）の一人にあげられ、四十歳まで続いて勤めた。次いで二年間野洲郡学区取締人の一人にあげられた。其の後村会議員、郡会議員となり、郡及び村治上に大いに尽した。農事改良、教育の改善、古社寺の保存等、其の徳行を数々挙げることが出来る。又菅原神社社殿の土塀の献立、菅原公千年祭工事委員となって日夜大いに尽された。大正四年十二月二十二日歿、八十歳。（郷土誌）

開拓使
北海道

井狩氏
北里村江頭

◎名医でしかもよい政治家^{すけつら}中島資行（1857-1920）

安政四年十月十八日京都に生まれ、江部の中島家を嗣いだ。十四歳の時、京都英語学校に学び、明治八年慶応義塾に入り医学を修めた。同十二年開拓使御用係函館病院在勤を命ぜられ、翌年同院副院長に進んだ。同十七年帰村して、医術を開業した。当時は医業を営む者が少なかったので、本村はもちろん近村より来診を受ける者が多かった。祇王・野洲・三上・北里四ヶ村の村医を兼ね、其の後明治二十九年県会議員に選ばれ、当時の大水害に際して、井狩欄左衛門氏らと協力して、農民のために地租免税の請願を議会に提出、通過させた。その後錦織寺道路の改修、祇王井川水論事件等に力を尽した。大正九年二月六十三歳で歿す。（郷土誌）

今まで戸長とって
いた。
現在まで村長は十四
人、十五代。
一人二回の人あり。

117

◎第一代村長 岩田重吉（1859-1916）

安政六年十月に生れた。生家は京都であるが、富波の岩田家を相続した。明治二十二年九月初代村長となり、三十二年まで四回其の任を全うした。其の治績の著しいものは、

年表「祇王井のな
がれ」にくわしく
あり。

- 一、野洲停車場設置請願――明治二十四年設置
- 二、祇王井川筋 今樋伏替工事――明治二十六年三月竣成
- 三、家棟川^{かいさく}随道開鑿工事（朝鮮街道）――明治二十六年
- 四、尋常高等小学校々舎改築――明治二十七年竣成
- 五、里道改修工事――明治二十七年十二月改修完了
- 六、在郷軍人出征中家族扶助料給与――明治二十七・八年戦役の時
- 七、伝染病者隔離病舎新築――明治二十九年
- 八、水災救済
- 九、学校基本財産蓄積の件

この頃傍系から佐官になるには中々苦しかった。もっと低い位でも刀をつる位になるには(刀つるか首つるか)といわれる程苦なんがあった。

村会議員、郡会議員又県会議員としても大いに尽す。明治四十三年地方自治功労者として、本県知事より表彰を受けられた。大正五年十二月歿。(郷土誌 野洲郡史)

◎強い意志の人 小野田一

118

慶応三年二月、大字辻町に生まれた。七歳で正徳学校に入学、十四歳で中等科を卒業、一年間同校の助教員を勤め、十六歳の時志を立てて、京都草場塾に入り二年間学んだ。十八歳で教導団の試験を受けたが、不幸身体のために不合格となった。しかし翌年再び受け、合格し入団した。其の後長く軍人生活にあり、日露の役中に陸軍少佐の位に昇った。かつて草場塾に学んでいる頃、学資に窮し食事の折にそばのだし雑魚の出しがらを買ひ、之を塩煮きして食べたという。

貧家より身を起し、奮闘努力したことは我々のよき手本である。(郷土誌)